

クライマーズ・ハイ

2008(平成20)年4月16日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★



監督・脚本＝原田眞人／原作＝横山秀夫『クライマーズ・ハイ』（文春文庫刊）／出演＝堤真一／堺雅人／高嶋政宏／尾野真千子／山崎努／遠藤憲一／田口トモロヲ／堀部圭亮／マギー／滝藤賢一／皆川猿時／でんでん／中村育二／螢雪次朗／野波麻帆／西田尚美／小澤征悦（東映、ギャガ・コミュニケーションズ配給／2008年日本映画／145分）

……あれから23年！ 1985年8月12日に発生した日航ジャンボ機墜落事故の取材と、紙面づくりに奮闘する地方紙の全権デスクたちの姿は……？ 男の嫉妬は、「大奥」に渦巻く女たちの嫉妬以上。そんな実感でいっぱい！ 「クライマーズ・ハイ」の意味をかみしめながら、ペンを持つ男たちの戦場をタップリと観察するとともに、今ドキの新聞報道のあり方にもしっかり問題意識をもちたいものだ。



クライマーズ・ハイとは？

「クライマーズ・ハイ」とは、「登山時に興奮状態が極限まで達し、恐怖感が麻痺してしまう状態」。この映画のプレスシートの最初のページにはそう書いてある。私は毎週日曜日にフィットネスクラブに通い、約2時間50分をかけての20km走を続けているが、過去10km マラソンに何回か出場した時に「ランナーズ・ハイ」という言葉をインストラクターから聞き、なるほどと納得したことをよく覚えている。ランナーズ・ハイとはつまり、走り始めてしばらくの間はしんどいが、そのしんどさを通りすぎると走ることで自分が気持ちよくなっていく状態のことで、私も何回も体験したことがある。

このランナーズ・ハイやクライマーズ・ハイが和製英語なのか、それともホントに英語として存在する言葉なのかは知らないが、なぜ1985年8月12日の日航ジャンボ機墜落事故をテーマとした映画のタイトルが『クライマーズ・ハイ』なの……？ 私の疑問は、まずはそんなところから……。

時間も、総カット数も『魍魎の匣』以上！

原田真人監督の『魍魎の匣（もうりょうのはこ）』（07年）は、『姑獲鳥の夏（うぶめのなつ）』（05年）に続いて京極ワールドの最高傑作を映画化したものだったが、私にはその物語は難しすぎたこともあり、採点は星3つ。原田監督は膨大な京極ワールドを2時間強にまとめようとしたものの、上映時間は133分。そして、総カット数は過去最高の2300になった（『シネマルーム16』159頁参照）。

それに対して『クライマーズ・ハイ』は、『半落ち』『出口のない海』などで日本人におなじみのベストセラー作家横山秀夫の原作であるうえ、あの1985年8月12日の日航機墜落事故発生をテーマとした映画だから、『魍魎の匣』よりはずっとわかりやすいのは当然。ところが何と、この『クライマーズ・ハイ』の上映時間は145分。そして、総カット数は過去最高の2541とのこと。さあ、そんな『クライマーズ・ハイ』に描かれるものは……？

地方紙（地元紙）とは？ 北関東新聞社とは？

私は07年11月9日から、大阪日日新聞で毎週金曜日に「弁護士坂和章平のLAW DE SHOW」の連載を始めた（08年4月5日から土曜日に変更）。

ネット情報を整理すると、2001（平成13）年に創刊90周年となった大阪日日新聞は、1942（昭和17）年に政府の新聞統合令で休刊したが、1946（昭和21）年に夕刊紙として復刊した。そして、2000（平成12）年には新日本海新聞社の傘下に入り、夕刊紙から朝刊紙に切り替わるとともに、創刊の原点に立ち返り、大阪人の代弁紙、大阪の地元紙とすることを目指した。また、2002（平成14）年11月からは株式会社ザ・プレス大阪が発刊していたが、2008（平成20）年2月に同社と株式会社新日本海新聞社が合併したため、以降株式会社新日本海新聞社大阪本社が発行することになった。私はこの連載を始めたことによって、地方紙（地元紙）というものの意味を少しずつ理解してきたつもりだった。

ところが、『クライマーズ・ハイ』を観てはじめて、群馬県における北関東新聞社の悠木和雅（堤真一）をはじめとするたくさんの新聞関係者たちが、地方紙の果たすべき役割にここまでこだわっていることを知って大感激！

全国紙は朝日、毎日、読売、産経、日経だが、私の出身地松山の地方紙である愛媛

新聞を含め、日本全国に存在する地方紙は、全国紙とは異なる独自性の発揮に命を懸けて頑張っているわけだ。

男の嫉妬心は、『大奥』以上！

この映画のテーマは1985年8月12日に起きた日航ジャンボ機墜落事故だが、私がそのテーマ以上に引き込まれたのは、そのテーマをいかに新聞紙上に表現するかをめぐって展開される、北関東新聞社内での権力争いと男の嫉妬心の展開模様。原作者の横山秀夫は、国際商科大学（現・東京国際大学）卒業後、上毛新聞社に入社し12年間も記者生活をしてきたため、地方新聞社の内情には詳しいよう……。

新聞社には普通、編集局、論説委員会、広告局、製作局、総務局、販売局等があるが、この映画の登場人物のほとんどはこのどこかの部署に所属している。いつも美人秘書の黒田美波（野波麻帆）を従えて車椅子に乗る北関東新聞のワンマン社長（というより独裁者！）が白河頼三（山崎努）。そして、もともと、ひとつの部署だけで処理できない社会現象を担当し、特定のクラブに属さず自由に取材できる「遊軍」の所属ながら、白河社長のツルの一声によって突然日航機事故全権デスクを命じられたのが、この映画の主人公悠木和雅。

そんな突然の全権デスク抜擢に対し、社内のあるところから不満の声が上がってきたのは当然。そしてそれは、単なる不満の声ではなく、れっきとした新聞社内の権力争い、あるいはれっきとした男の嫉妬心のぶつかり合いであることは明らかだ。男はよく、「女の嫉妬心は云々」とほざき、『大奥』（06年）で描かれた女の嫉妬心の展開をバカにするが、実は男の嫉妬心だって、それに負けず劣らず醜いもの！ それが、この映画を観ていると実によくわかる……？

映画の実態は『ブンヤ奮闘記』……？

原田監督の『魍魎の匣』も登場人物が多く整理するのが大変だったが、それは『クライマーズ・ハイ』も同じ。とりわけ北関東新聞社内の強者たちは、基本的には①役職と地位、②担当部局によってそれぞれの役割が決まるが、それ以上に群馬県に日航ジャンボ機が墜落したとなると、地元紙としては必死にそれを追い、「北関東新聞ここにあり！」と模範を示さなければならないと全員が張り切ったのは当然。

この映画のメインストーリーは、1985年8月12日の日航ジャンボ機墜落の第一報

を受けた後、1週間の間に展開される北関東新聞社の報道をめぐる人間たちの闘い。したがって、その実態にふさわしいタイトルは、『クライマーズ・ハイ』よりは、『ブンヤ奮闘記』あるいは『取材競争記』ともいうべきもの……？

日航ジャンボ機全権デスクを仰せつかった悠木と、①白河社長―編集局局長粕谷隆明（中村育二）―一次長追村穰（螢雪次朗）という縦のラインとの軋轢、②本来、日航機事故の報道を受け持つべき社会部部長等^{とどろき}タ力庸平（遠藤憲一）との軋轢、③広告と販売促進を担う販売局局長伊東康男（皆川猿時）との価値観の衝突をはじめとして、全権デスクに就任した悠木の仕事は大変。

キーパーソンを2人だけ……

悠木と彼らの激突ぶりを1つ1つ紹介すればキリがないので、それは一切省略し、第一線での激しいケンカを含めて男たちの迫力はあなた自身の目で。そして、ここではポイントとなる人物を2人だけ紹介しよう。

キーパーソンの第1は、社会部で県警キャップをしている佐山達哉（堺雅人）。彼は地域報道班の部員神沢周作（滝藤賢一）と共に直ちに現地へ飛び、リアルな第一報を第一面に掲載させようと必死の努力を続けたが……。第2のキーパーソン（ウーマン）は、地域報道班の所属ながらスクープに燃える玉置千鶴子（尾野真千子）。彼女はジャンボ機墜落の原因が「隔壁」破壊にあるとの情報をつかみ、佐山と共に奮闘するが……？

（地元）新聞の紙面づくりがいかに大変か、とりわけ大惨事を含め新聞が報道すべき大事件が発生した場合、それをいかに早くかつ正確、的確にそしてわかりやすく伝えることが大変かということが、この映画を観ているとよくわかる。

いろいろな物語と争点・テーマがテンコ盛り！

今から23年前、悠木は山登り仲間の安西耿一郎（高嶋政宏）と2人で群馬県の谷川岳にある衝立岩に挑戦するはずだった。ところが、突然飛び込んできた共同通信社からの「羽田発大阪行き日航123便が墜落した模様。乗客乗員524名」との第一報によって、悠木も安西もその後の運命が大きく変わることになった。したがって今、安西の息子燐太郎（小澤征悦）と2人で谷川岳に登っている悠木の胸中に帰来するものは……？この映画では、そんな衝立岩へのチャレンジの姿が随所に挿入されるから、『クライ

マーズ・ハイ』というタイトルにも納得……。

悠木のログセは「チェック、ダブルチェック」。これは、悠木が子供の頃に観た新聞記者を主人公とするある映画の中のセリフだが、それが悠木が新聞記者を目指す決定的動機になったらしい。つまり、彼は「チェック、ダブルチェック」というセリフを言うために新聞記者になり、今、全権デスクとして日航機墜落事故の報道を「チェック、ダブルチェック」しているわけだ。

そんな悠木が最後に決断を迫られるのは、佐山達哉と玉置千鶴子が極秘取材で集めてきた事故原因に関するあるスクープ。それを朝刊トップで載せるべきか否か、締切りギリギリの午前1時30分が迫る中、悠木は究極の決断を迫られたが……？

この映画には多くの人物が登場する。そして、8月12日以降日航機事故の報道が北関東新聞のトップを飾る間ずっと、全権デスク悠木と各部署の人間との間の対立模様が描かれていく。したがって、その対立の中から生まれてくるさまざまな物語と、そこで見えてくる争点・テーマがテンコ盛り！ そんな面白さに引きずり込まれた観客は、145分という上映時間を長いとは思わないはず。少なくとも私はそうだったが、さてあなたは……？

2008(平成20)年4月17日記